

## 岐阜大学農場支援サークル 作って楽しむ会

### 発足のきっかけ

平成16年、岐阜大学の農学部が応用生物科学部に改組された。同時に学部附属施設である農場と演習林が統合され応用生物科学部附属岐阜フィールド科学教育センターが発足した。統合した当時の農場は人手不足が顕在化しており、農場内の管理が行き届いていないところが数多くあった。そこで、農場運営に携わる大学教員や職員の中で農場運営に学生も一部携わってもらえないかとの発想で農場支援サークル結成の提案がされた。一方学生の中では農場に関わる活動や、未来を見据えた一次産業の実践的な学習を望むものが多くいた。こうして農場と学生の考えが合致したことで農場支援サークル結成の方向性が決まった。実際のサークルの活動内容は農場の管理支援を行うことと、農場から借り受けた圃場での作物の栽培、その収穫物の加工・商品化等を行うことになった。名称を「農場支援サークル 作って楽しむ会」として発足するにいたった。そして現在もこの活動を新たな学生が毎年引継ぎ「農場支援サークル 作って楽しむ会」として2年生を中心に活動している。発足当初のサークル員は学部内の学生のみであったが現在は他学部の学生も受け入れ全学的なサークルになっている。

### 活動内容および団体の特徴ポイント

#### ・これまでの活動

##### 1. 農場管理補助

農場内の各施設や圃場での管理を行う。管理の内容は多岐にわたる。昨年度は圃場管理、果樹園管理、牛舎管理、鶏舎管理に携わった。

圃場での作物の管理や果樹管理を行うにあたって、生産の場で必要となってくる作業を技術職員の方から学び、身に付けていった。具体的には作物の品質や栄養状態を上げるための芽かきや摘果、果樹の枝打ちなどである。牛舎管理では仔牛成長の環境を整えたり、全体の清掃、一部搾乳したりと管理の大部分を経験した。牛の搾乳は毎日行わないと病気にかかってしまうため、一部の学生は土日に登校して、朝・夕の搾乳と餌やりを行っていた。また、昨年度までは鶏舎の管理として、ヒナの予防接種を行ったり、成長段階に合わせた飼育場所の移動を行ったり、デビークを行うなどの管理をするだけでなく、鶏の解体などを通して実際に我々が口にしている食肉がどういった過程で食卓に上がるかを考えた。農場で飼育していたのは雌鶏で一個体あたり一日一個産卵するので、一部の学生は土日に卵収集を行っていた。食品加工では農場内の果樹園で採れた果実でジャムを、鶏舎で採れた鶏卵でプリンを、圃場でとれたダイコンやキュウリを使って酒粕漬を作るなど、生

産から加工までの流れを確認した。生産された商品は農場内で販売された。

## 2. サークル畑の管理と商品開発

農場内で割り当てられているサークル畑で作物を栽培した。収穫できた作物を使って商品開発を行い、完成した商品を大量に生産して大学祭の模擬店で販売をした。昨年度はスウィート・パンプキン、薩摩芋と南瓜のスコーン、卵プリン(農場でとれた卵を使用)を販売した。また、作物栽培にあたって、珍しい品種やスーパーでは販売されていないような野菜の種・苗を積極的に定植し、栽培の難易度を明確化させ、収穫した後で各々試食して意見を交わすことで、その品種に合った食べ方を考えた。野菜の種類が偏りがちな現代の食卓に様々な種類の彩を加えられる可能性について模索した。

## 3. 行事の運営や食育支援

オープンキャンパスでの農場ツアーの運営や毎年大学内で開かれる花市の支援などを行うなど各行事の運営や運営補助を行っている。また、農場が行う幼稚園児とその家族を対象とした公開講座で地元の幼稚園と連携して園児による稲の収穫体験であったり、薩摩芋掘り、タケノコ掘りであったりという食育の場を手伝い、食育支援に貢献している。一般向けに開かれている公開講座でもティーチングアシスタントとして参加し、講座の運営を補助している。また、昨年度は地元のカフェと岐阜女子短期大学の学生の両者と連帯し、子どもが格安でお腹いっぱい食べられる、「子ども食堂」の運営を行った。

## ・コロナ禍での活動

### 土地開拓

コロナ禍で学内での活動が制限されたものの、屋外での活動制限が緩和されたため、屋外での活動が中心になった。

新たなサークル畑として耕作放棄されている実験圃場を整備し土壌消毒などを行うことで作物が栽培可能な状態にした。その際、土壌消毒が環境に与える影響などを改めて考え、他の植生や環境に悪影響を及ぼさない方法について模索した。

## 今後の展望

耕作放棄地の管理では、次世代に向けて草木堆肥のほかに農場内で飼育している牛の排出物を発酵させることで堆肥化して利用をしたり、作物収穫後の畑にレンゲソウをまいたりなどの緑肥で土地を肥沃にしようと考えている。さらに、不可食部の植物体を発酵させて堆肥にすることも検討している。牛舎管理や鶏舎管理は両施設の建て替えにより、アニマルウェルフェアの実現を施設機能・生産管理機能の両方の視点から目指す。目標は持続可能な農業の確立である。

また、商品加工については、農場サークルは各世代で商品開発の視点が異なる。燻製メインで開発する世代もあれば、お菓子に力を入れる世代もある。コロナ騒動が収束に向かうとすれば、我々の世代は、収穫物の顔ぶれからどういった商品が向いているのかをあらゆる方向性で検討し、開発に臨もうと検討している。コロナ騒動が継続している現在では屋内の加工施設で長い時間活動することは難しいため、サークル畑で収穫した野菜の販売も視野に入れている。すでに行われている農場の販売と連帯して、一人暮らしの下宿生や地元の方に向けて、手軽でかつ需要にあった内容で販売活動を行う予定である。今年度はコロナ禍で各行事が中止されているが、落ち着きが見られた段階で収穫体験などのイベントを再開していく方向性である。